

【ジャパントイムズ記事の翻訳】（訳文 日本手話通訳士協会）

尾崎 トモヒロ 記者

菅義偉官房長官による定例会見を待つ記者たちは、広々した首相の部屋の片隅に静かに座っている江原こう平にはほとんど気がつかないようであった。

官房長官の到着が告げられると、江原は立ち上がり、少し手を伸ばして、部屋の反対側から入ってくる菅と同時に演台に向かった。江原は安倍首相の片腕である菅の横に、報道陣に向かい合う形で立った。

一人の手話通訳者が政府のトックスピークスマンのことばを伝えるという非常に大きな使命はこのようにして始まる。

「大変な緊張を要する仕事ですが、政府のことばを聞こえない人たちに伝えというとてもやりがいのある仕事です。」と江原は言う。

43歳の江原は菅官房長官の、日に二回の定例記者会見の手話通訳を担う数十名の専門職のひとりで、その手話通訳は非常に高度な技術を要するものである。

会見の前は、「体をほぐすために簡単なストレッチをするようにしています。というのも、原稿を読む話のスピードに送れないように、手を早く動かさなければいけないことがあるからです。」と言います。

彼らは「影の英雄」といわれることがあるが、それはTV局のカメラが官房長官だけを捉え、手話通訳が画面に映し出されないからである。

自然災害や緊急事態が発生しない限り、彼らは画面に出ることはほとんどなく、あったとしても、それは過去に収録された首相官邸のウェブサイトの映像であることがほとんどなのだ。

2011年3月、内閣官房長官の記者会見に手話通訳が付いた。それは東北の巨大地震による津波と、三つの原子力発電所の事故の同時発生した時で、政府が聞こえない人への情報の遅延を避けるために準備したのが最初である。それ以後、手話通訳者は起こりうる事態に備えて、いつでも対応できる体制を整えている。

江原は手話通訳を職業としているプロの通訳者である。裁判所や病院、会社などで手話通訳を行う中、2週間に一度程度、政府の記者会見の通訳を担当している。江原のように経験の長い通訳者であっても、政府のトックスピークスマンの手話通訳は決して容易ではない。政府で使う専門用語の中には手話にはない言葉もあるため、「指文字」を駆使して伝えていく。また、菅の会見は多岐にわたるため、手話通訳者は事前に新聞やネットを熟読し、記者から出されるであろう質問に備えて、準備をしていく。

「新聞を熟読し、官房長官が通常答えるものと近い回答を想定します。そのために、事前知っておかなければいけない背景情報が必要なのです。」と手話通訳者の萩埜友美は語る。

36歳の萩埜は3年前に初めて官房長官の手話通訳をした時の恐ろしさを思い出す。その時、ただ官房長官の横に立っただけでもレポーターたちの前で緊張したという。以前よりは緊張はしなくなったとはいえ、記者会見に慣れたとは言えないと述べる。「病院やそのほかの通訳現場では、私が通訳を行う対象のろう者は同じ空間にいます。つまり、(手話通訳が分からなければ)理解ができていないという即時の反応を知ることができるのです。しかし、首相官邸では私はカメラの向こう側にいるろう者に向かって話しかけているので、自分の手話が果たして理解してもらっているのかを常に不安に感じます。」

同時通訳は非常に集中力を要するために、江原はよくチョコレートを持ち歩き、脳が疲れて糖분을欲しがる時に食べるようにしている。

記者会見で使われる手話は日本語と異なる言語構造になっている。つまり、手話通訳者は菅官房長官のことばを別の言語に置換しており、そのために高い集中力が求められる。手話通訳者がいつも二人一組で組んで通訳を行い、また継続して10分以上の通訳を行わないのは、集中力を維持に、通訳の質を落とさないためであると、江原は述べている。

江原の8年間のキャリアの中で、最も印象深いのは、今年の4月の「美しい調和」を表す令和の元号の発表の時だと言う。

記者会見の時、手話通訳が国中の注目を浴びることになった。NHKが生中継で元号発表の映像を撮っていた時に、江原の手話のワイプがその漢字を隠してしまい、論議が巻き起こったのだ。メディアは直ちにそのミスを経史的瞬間に影が差したと書きたてた。江原はこの出来事が手話通訳者に対する否定的感情になるのではないかと恐れたと述べている。「画面にワイプを入れた局はNHKだけであったが、そのNHKで起こったことによって、他の局が、手話通訳を画面に出さなかった自分たちが賢明な判断をしたと思うことは非常に悲しいことだ」と述べている。

日本のテレビには事実上、手話通訳はほとんど入っていない。2017年度の総務省の統計によると、東京の5つの主要テレビ局の放映時間のうち、手話通訳が付いているのは、0.1%だけである一方で、字幕は61.4%で、前年度より1.9%伸びている。手話通訳者が画面に出ないのには、その役割に対するメディアの無理解が根底にある、と日本手話通訳士協会の鈴木唯美理事は言う。今回の菅官房長官の会見での出来

事は、いかに手話通訳が報道の場で重要視されていないかを逆に示すことになった。同時に官房長官の顔だけを映し出す（手話通訳者を画面に出さない）ことで、聴覚障害者がどのような不利益を被るかに思い至ることができないメディア側の失態を証明することになった」と述べている。

また、手話通訳の仕事に対する過小評価がこの仕事の不安定な雇用状況に結びつき、首や肩の病気の原因となる手や腕の酷使が引き起こす病状（頸肩腕症候群）に対する災害補償が十分になされないという事態が起こっていると鈴木は言う。

全国手話通訳問題研究会による 2015 年の調査では、福祉・医療・教育の分野で雇用されている手話通訳者 1099 人のうち、82.1%が非正規雇用となっている。

政府は、官房長官の会見に手話通訳を付けるという形で、手話通訳の存在をできる範囲で国民に示していると述べている。

「以前は会見者はもっと離れた位置に立っていたが、今は官房長官の近くに立ってもらっている。これ以上は無理。」と田原チセ事務官は言う。「画面の中に手話通訳者を写し込むことで放送側にとってももっと簡単になるのではないのでしょうか。」とも言う。

改善への変化は遅々としたものであろうが、江原も萩埜も変革をもたらす役割を担っていると信じている。

「デジタル化の時代、TV 番組にはこれからますます字幕がつくようになっていくでしょう。しかしろう社会の中には、手話をその生活の中のコミュニケーション手段の基盤としているろう者がおり、手話通訳は必要不可欠なのです。官房長官の会見に手話通訳を入れることは、ろう者にきちんと情報提供をしていることになる」と政府は考えており、それはとても重要なことだと思う。」と江原は言う。